

# 情動的情報と客観的情報が 人々のリスク判断に与える影響

グループ演習第6班

メンバー

新井 佑佳      塚崎 大貴      長谷川 暖

アドバイザー教員

掛谷 英紀

# 発表内容

1. 研究背景・目的
2. 調査概要
3. 集計
4. 分析
5. まとめ

# 1. 研究背景 · 目的

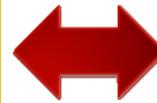
# 背景

研究者

統計的・データの情報

マスコミ

被害者の体験談  
(生い立ち・生活環境)



主要価値類似性 (SVS) モデル

価値類似性が高い

→ 相手を信頼しリスク情報を判断

情動的情報

客観的情報



リスク判断への影響

# 目的

情動的情報

客観的情報

リスク情報の判断？

→ それぞれ、  
相反する情報を与える



- ・ 個人属性
- ・ 情報を与える順序
- ・ 与えた情報に対する共感度合い

## 2. 調查概要

アンケート調査

➡ 題材はタミフル

	情動的情報	客観的情報
撮取した ➡ 副作用	「親友」 体験談	
撮取しない ➡ 合併症	「母親」 体験談	

「親友」体験談…親友がタミフルの副作用による異常行動で亡くなる物語調体験談

「母親」体験談…タミフルを撮取させず、子供をインフルエンザ脳症で亡くした母親の物語調体験談

# アンケート調査

➡ 題材はタミフル

	情動的情報	客観的情報
摂取した ➡ 副作用	「親友」 体験談	「異常行動」 データ
摂取しない ➡ 合併症	「母親」 体験談	「肺炎抑制」 データ

「異常行動」データ…タミフルを摂取した群が摂取しない群に比べて異常行動をとるリスクが高いという研究結果

「肺炎抑制」データ…タミフルがインフルエンザ合併症の肺炎を抑制するという研究結果

情報提示順



4パターン提示する

Pattern 1



Pattern 2



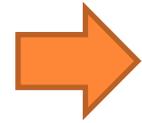
Pattern 3



Pattern 4



## 質問事項



情報を与える度に質問を行う



Q1.タミフルを危険な薬だと思うか

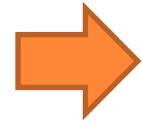
Q2.自身がインフルエンザにかかった際、医者からタミフルの摂取を勧められたら、タミフルを摂取するか

Q3.子供がインフルエンザにかかった際、医者からタミフルの摂取を勧められたらタミフルを摂取させるか

Q4.政府はタミフルの使用を規制すべきだと思うか

Q5.本文章にどれくらい共感したか  
(「親友」「母親」の後のみ)

# 実施概要



大学生と社会人を対象

全体			
721			
学生		社会人	
235		486	
男	女	男	女
183	52	71	415

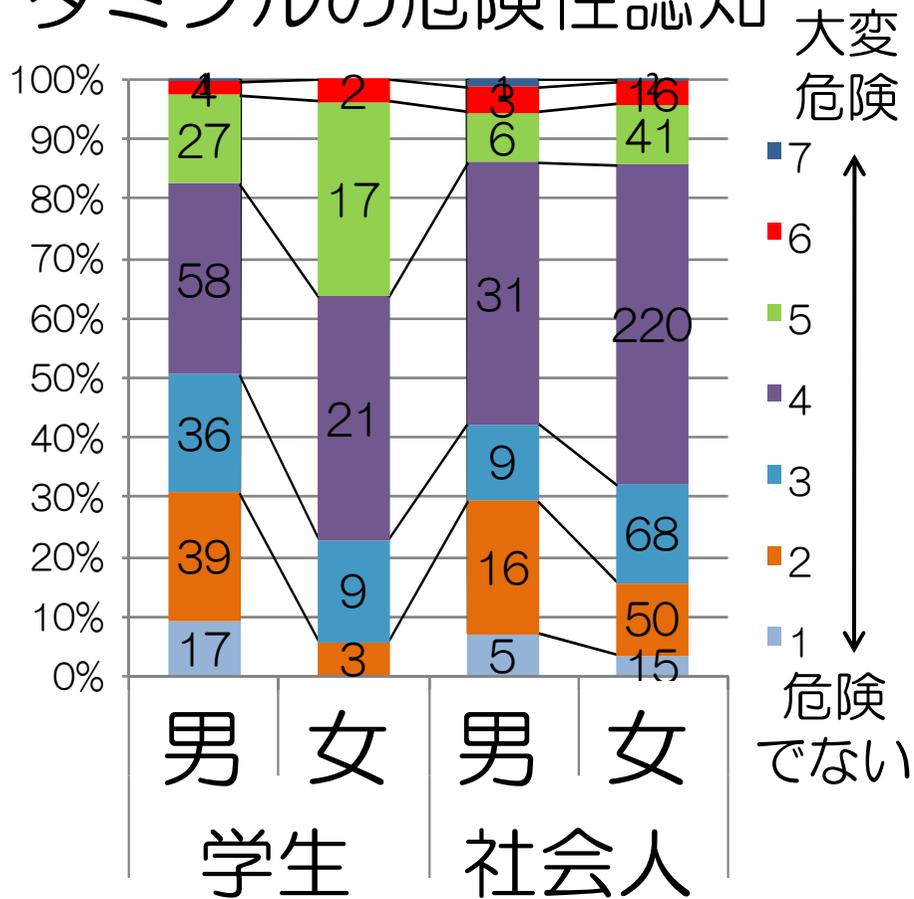
7/9~9/8  
筑波大学

8/29~9/7  
ジョイフルアスレティック  
クラブ

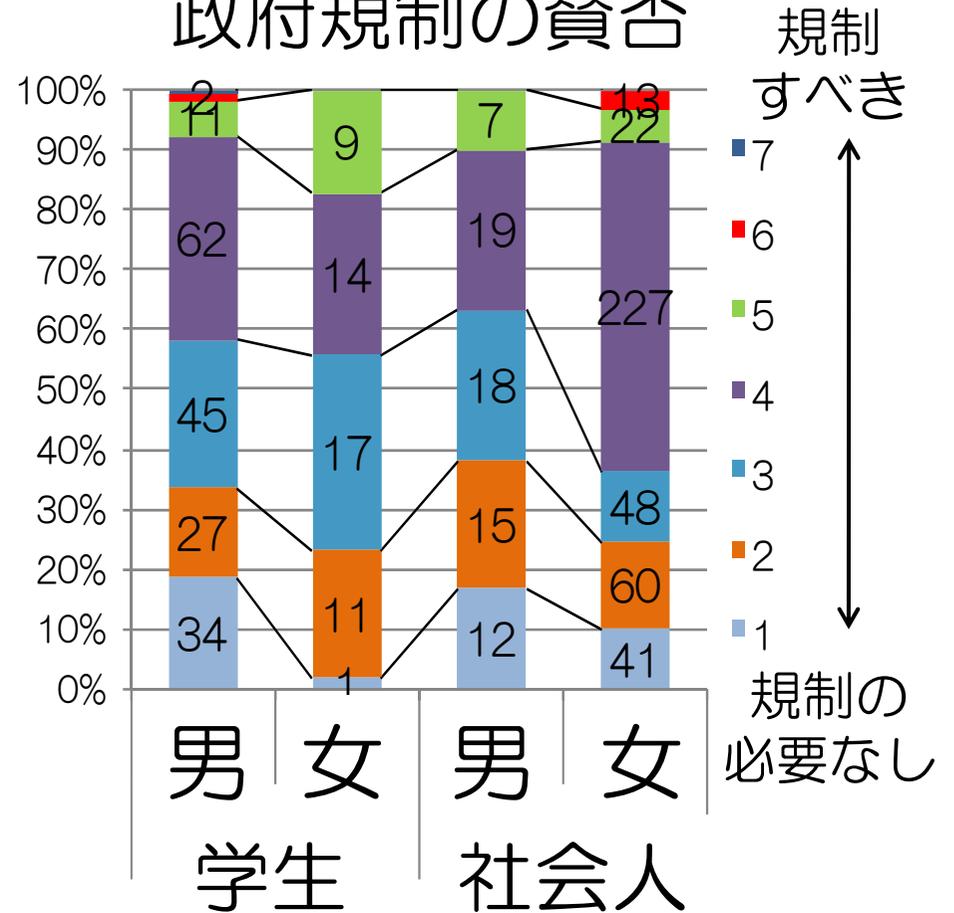
# 3. 集計

# 初期傾向

## タミフルの危険性認知

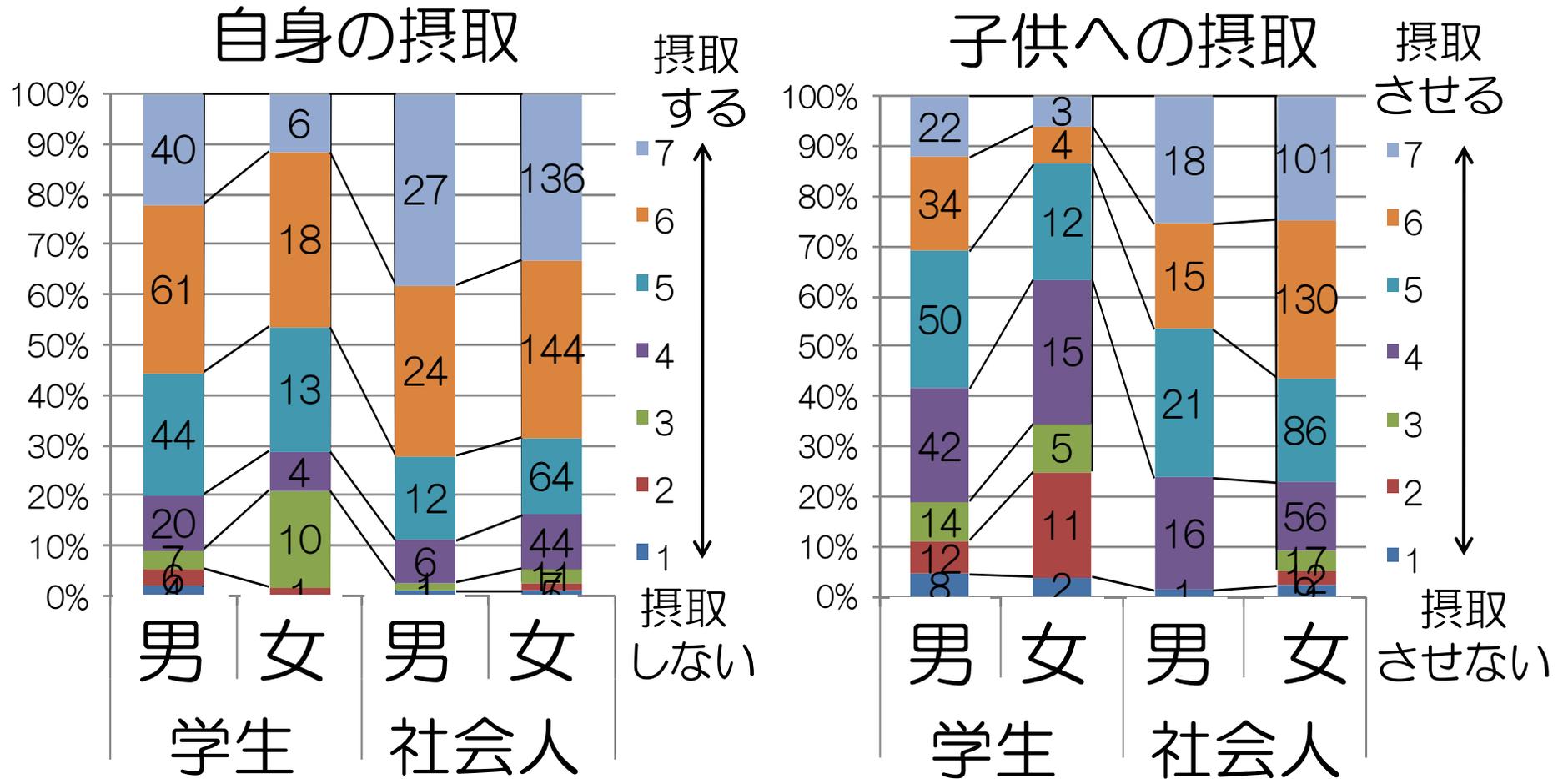


## 政府規制の賛否



男性の方がタミフルをより危険でないと認知し、規制しなくて良いと考える傾向が強い

# 初期傾向

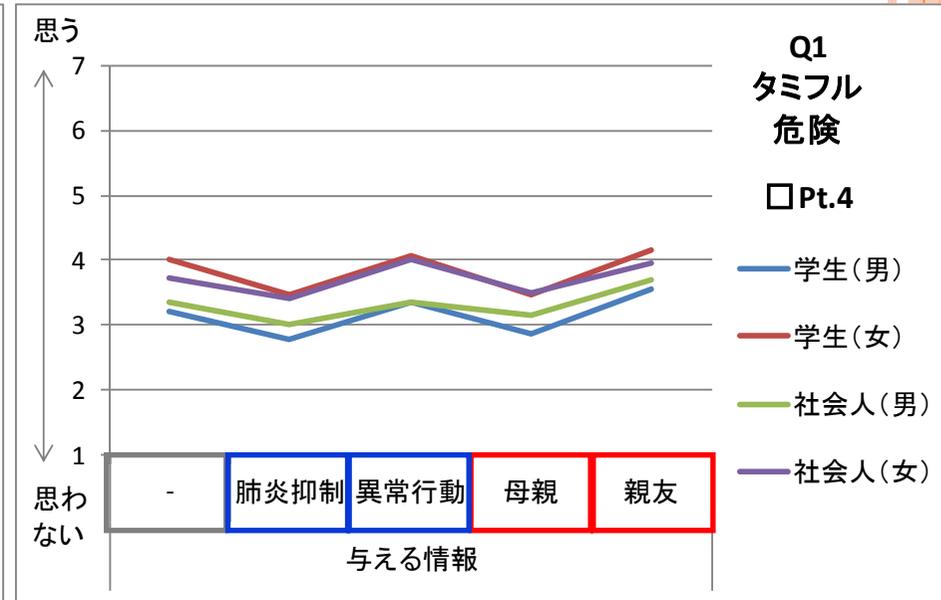
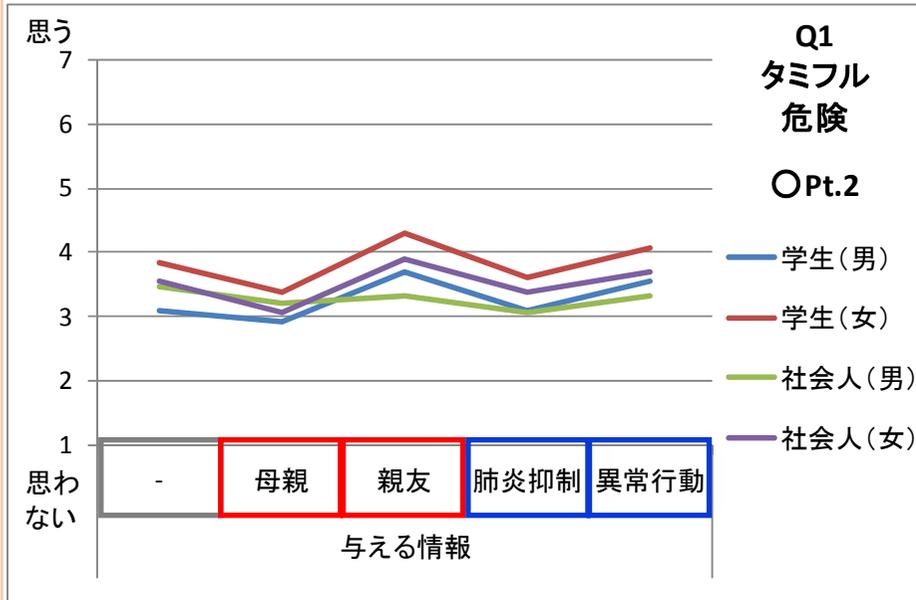


学生の方がタミフル摂取に消極的

# Q1タミフルの危険性認知

先に情動的情報のグラフ (Pt.2)

先に客観的情報のグラフ (Pt.4)

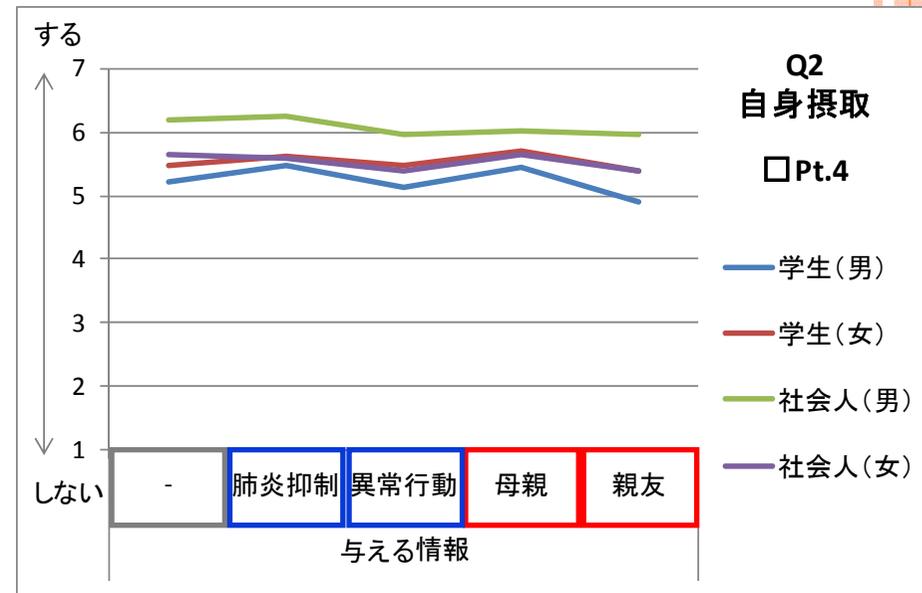
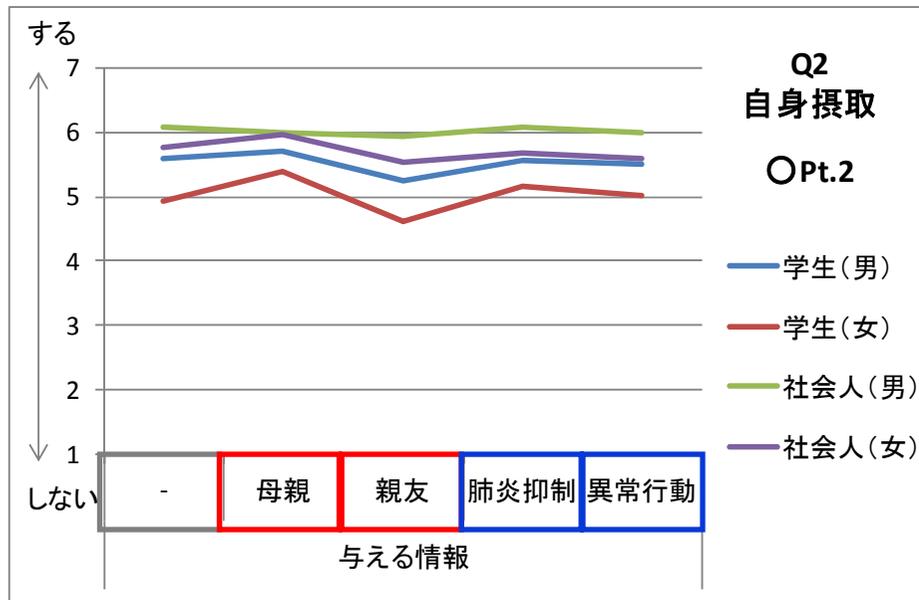


- どの情報をどの順番で与えても同程度に変化している

# Q2自身の摂取

先に情動的情報のグラフ (Pt.2)

先に客観的情報のグラフ (Pt.4)

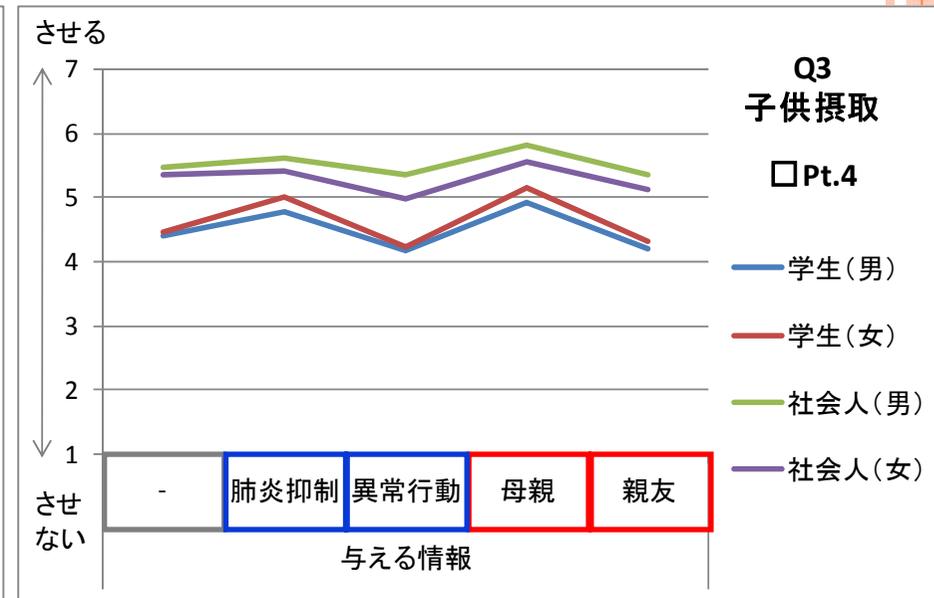
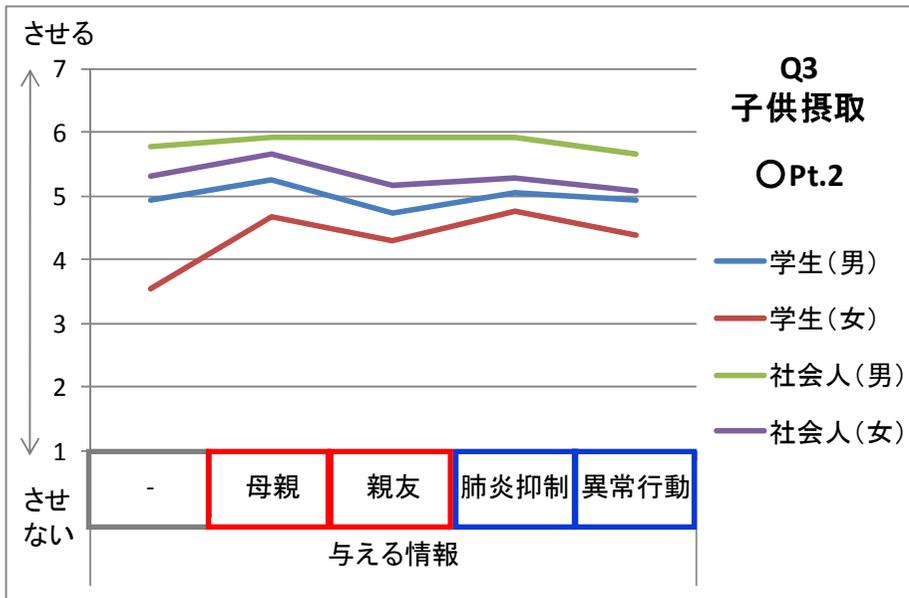


- 危険性の認知より情報に影響されにくい
- 情動的情報の方が客観的情報より影響力が大きい。

# Q3子供への摂取

先に情動的情報のグラフ (Pt.2)

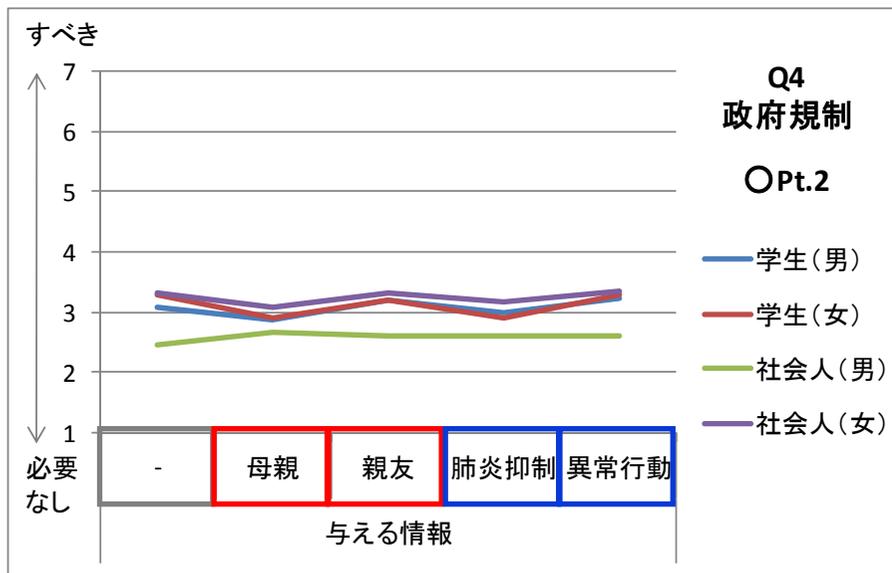
先に客観的情報のグラフ (Pt.4)



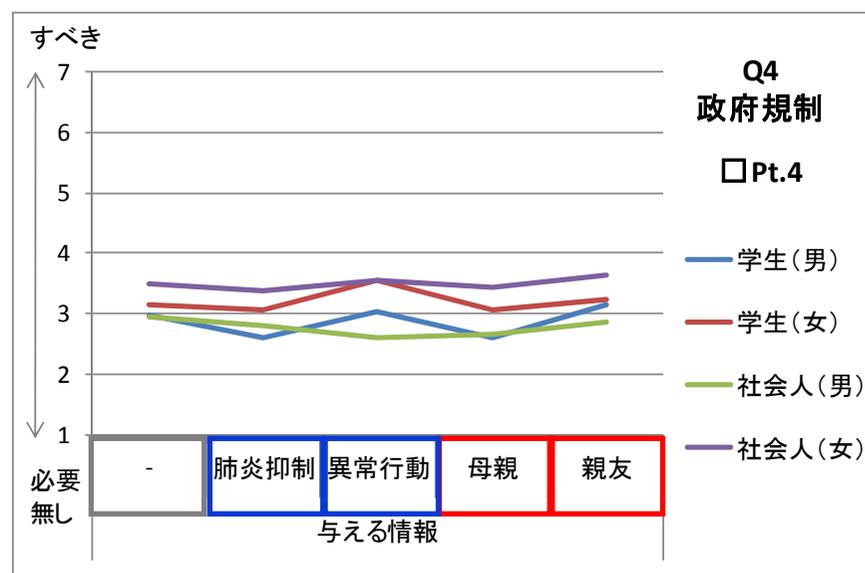
- 自身の摂取よりも情報による変化が大きい
- 客観的情報は、情動的情報を与えた後では及ぼす影響が小さい

# Q4 政府規制の賛否

先に情動的情報のグラフ (Pt.2)



先に客観的情報のグラフ (Pt.4)



- 各属性とも情報提示によるリスク判断の変化は小さい

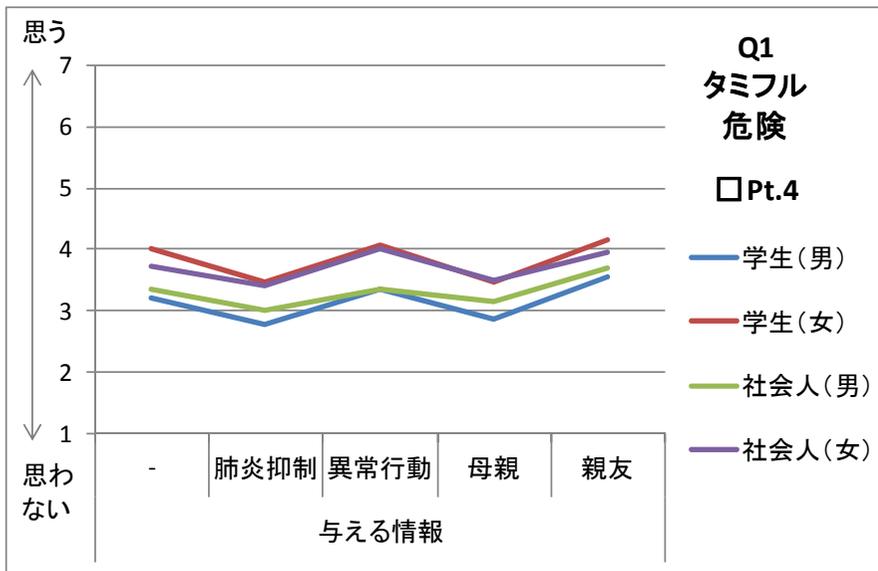
## 集計のまとめ

- 質問項目によって、変化量が異なる
- 属性別でも変化量が異なり、学生（女）は変化が大きく、社会人（男）は、変化が小さい
- **情動的情報**は、その提供順序によらず自身の摂取、子供への摂取の行動意図に影響を与える
- **客観的情報**は、**情動的情報**を与えた後では、摂取の行動意図への影響力を失う

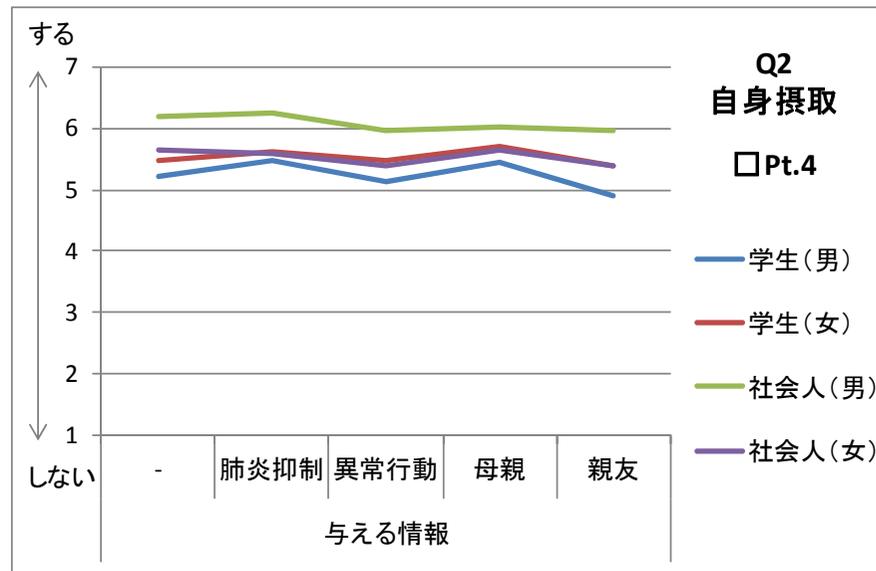


情報が**情動的**であるか、**客観的**であるかの違いと  
情報の提示順番によって影響力が変わること  
この点に着目し、分析を行う

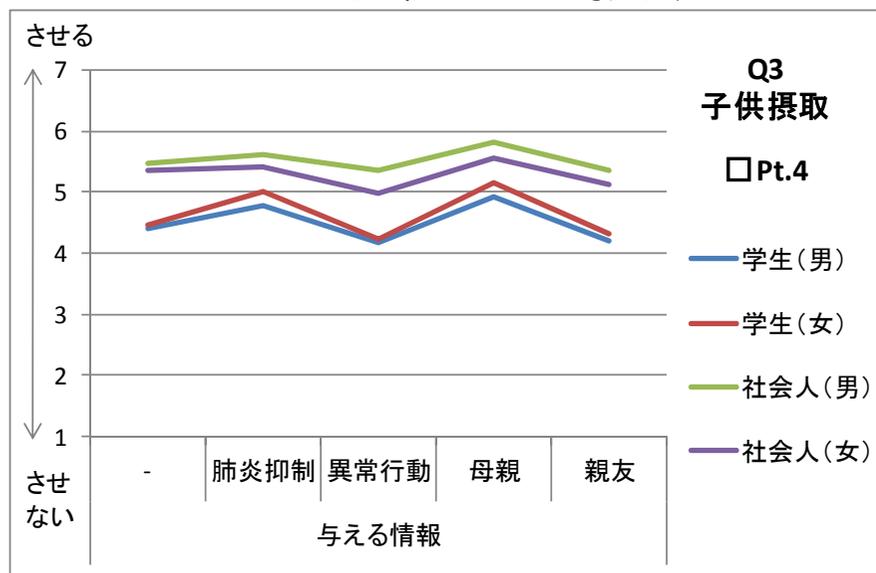
## Q1 タミフル危険性の認知



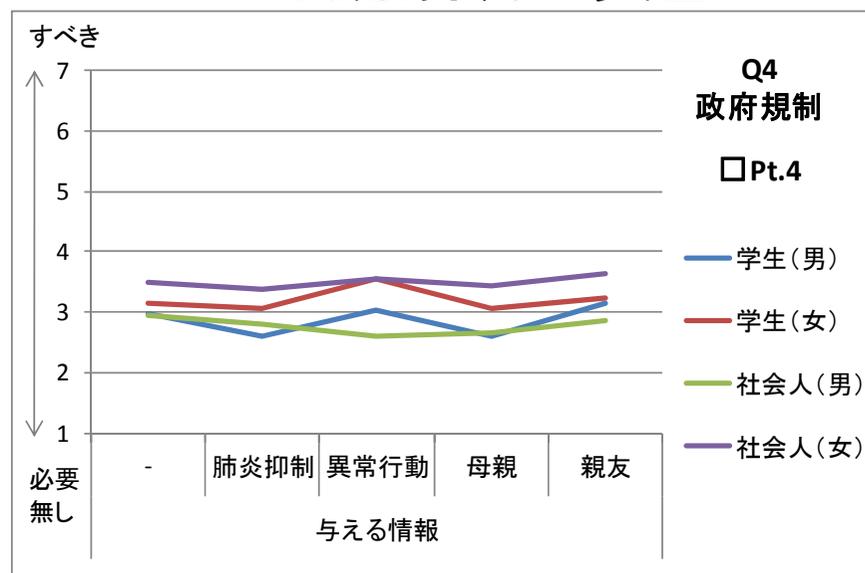
## Q2 自身の摂取



## Q3 子供への摂取



## Q4 政府規制の賛否



## 集計のまとめ

- 質問項目によって、変化量が異なる。
- 属性別でも変化量が異なり、学生（女）は変化が大きく、社会人（男）は、変化が小さい。
- **情動的情報**は、その提供順序によらず自身の摂取、子供への摂取の行動意図に影響を与える
- **客観的情報**は、**情動的情報**を与えた後では、行動意図への影響力を失う



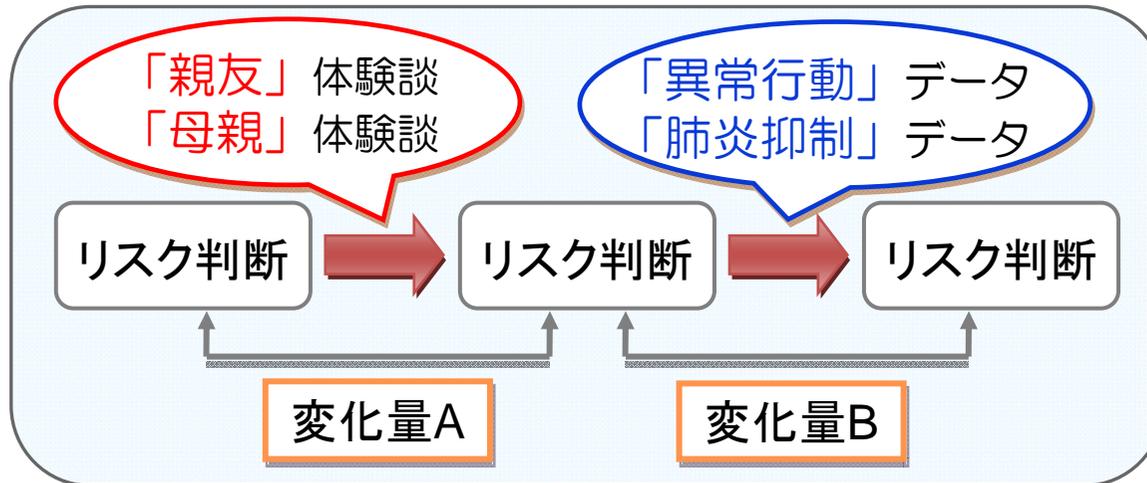
情報が**情動的**であるか、**客観的**であるかの違いと  
情報の提示順番によって影響力が変わること  
この点に着目し、詳細に分析を行う

# 4. 分析

# 分析方法

## ○ 4パターンある情報提示順序を大きく2種類に分ける

- 情動的情報→客観的情報 (Pt.1, Pt.2)



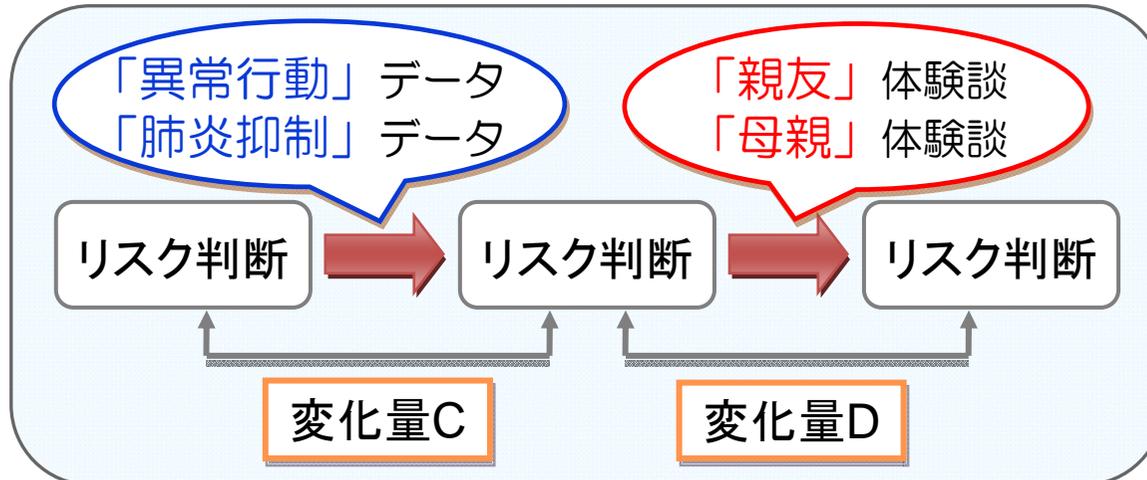
### 変化量A

「親友」による変化量平均  
+  
「母親」による変化量平均

### 変化量B

「異常行動」による変化量平均  
+  
「肺炎抑制」による変化量平均

- 客観的情報→情動的情報 (Pt.3, Pt.4)



### 変化量C

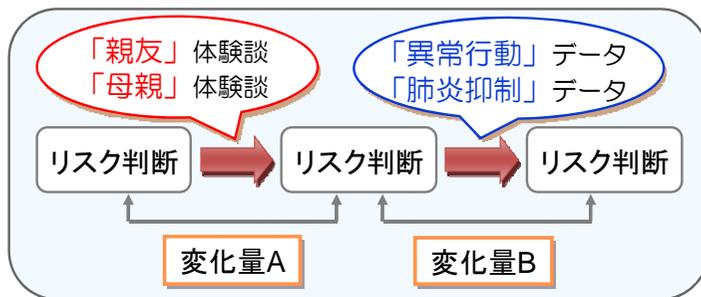
「異常行動」による変化量平均  
+  
「肺炎抑制」による変化量平均

### 変化量D

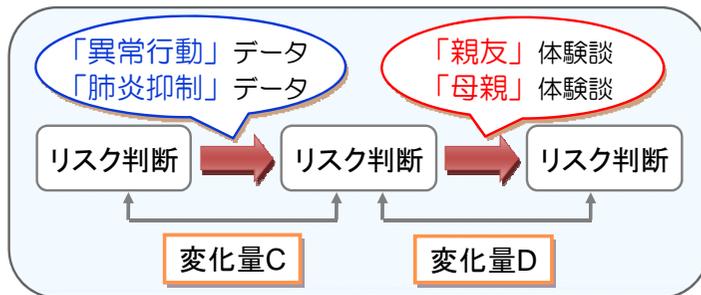
「親友」による変化量平均  
+  
「母親」による変化量平均

# 分析方法

情報の種類と提示順序に注目して、各質問への回答の変化を分析する



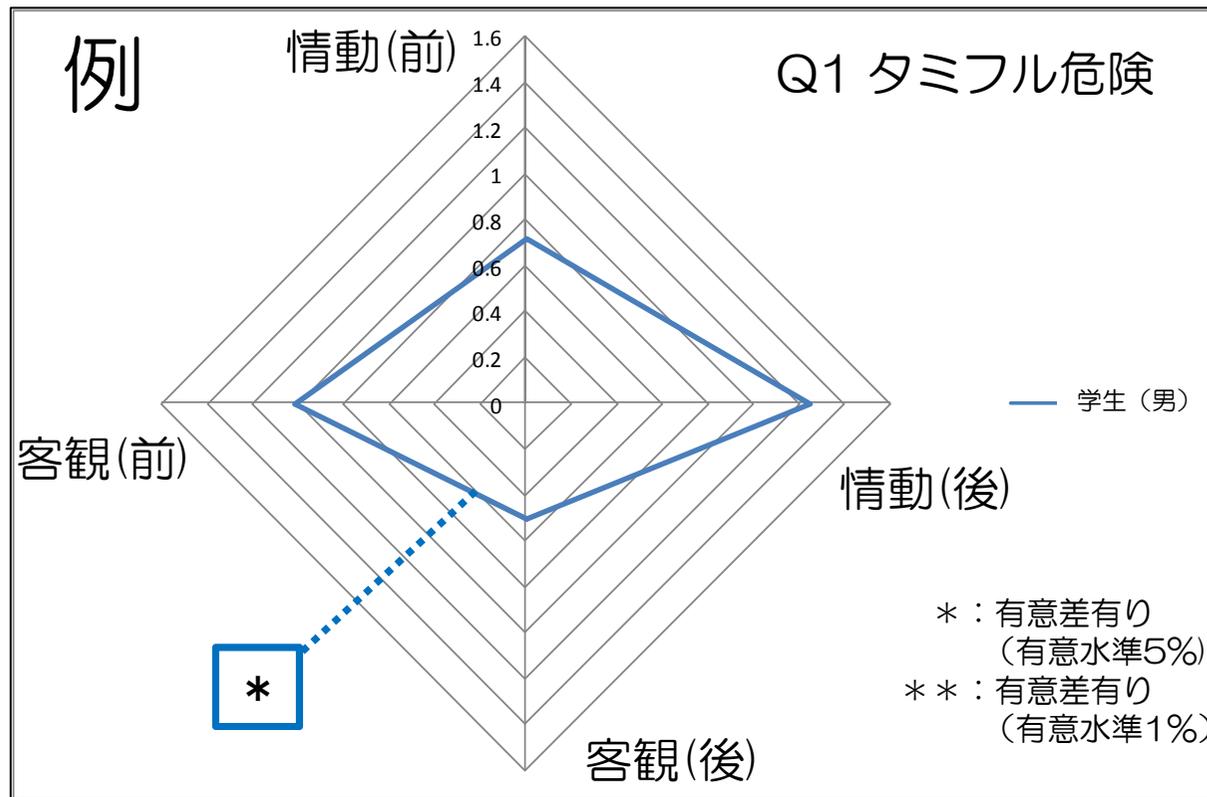
- 情動的情報(前)の影響 (変化量A)
- 客観的情報(後)の影響 (変化量B)



- 客観的情報(前)の影響 (変化量C)
- 情動的情報(後)の影響 (変化量D)

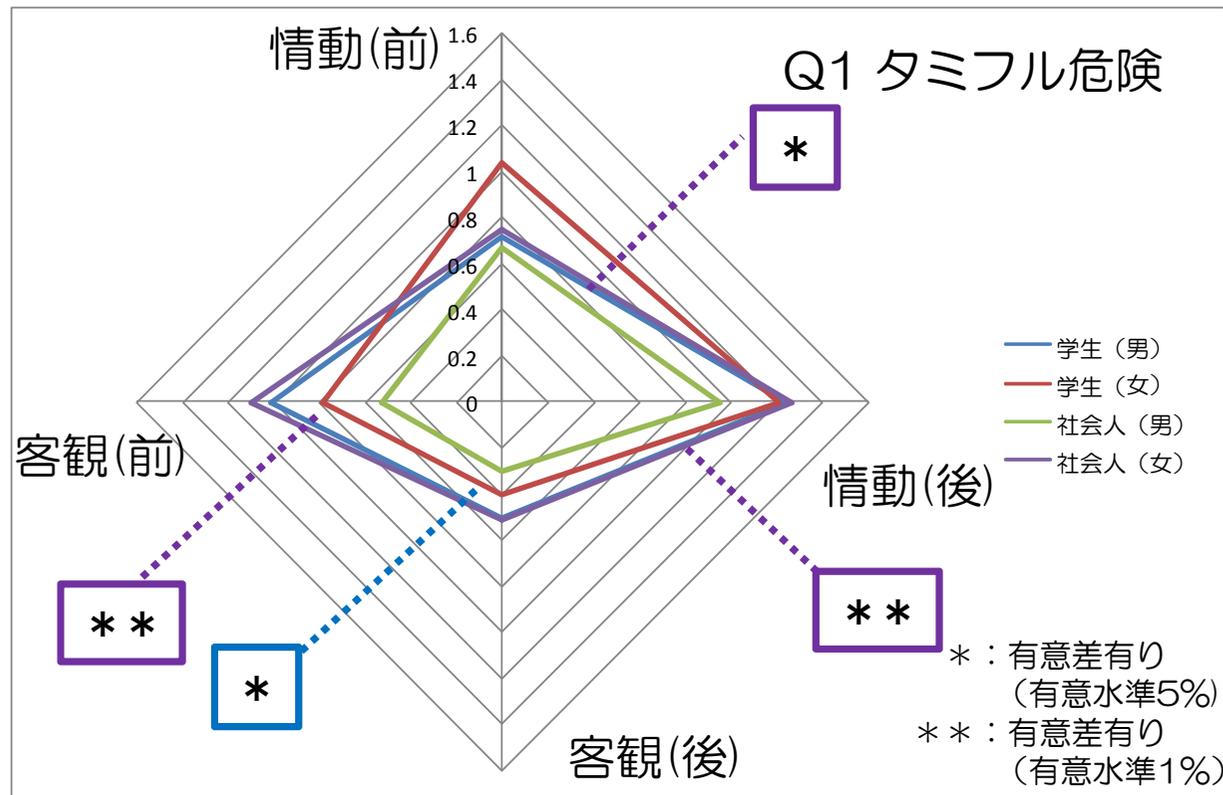
マン・ホイットニーのU検定を用いて  
各条件間の回答の変化量に有意差があるかを検定

# グラフの説明



- 4つの条件間の比較結果を示したグラフ
- 各情報を与えたときの変化量を比較

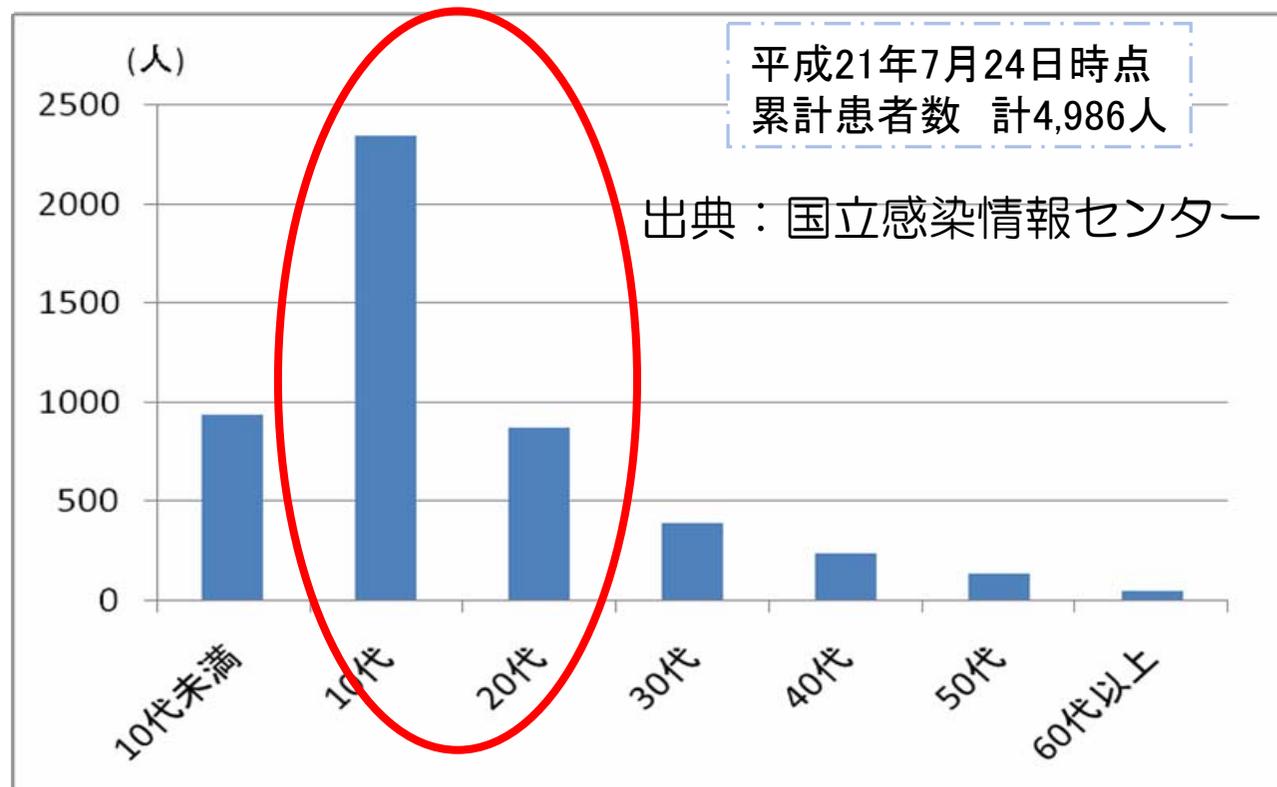
# Q1 タミフルの危険性認知



- 客観的情報は、情動的情報の後では影響力が小さくなる

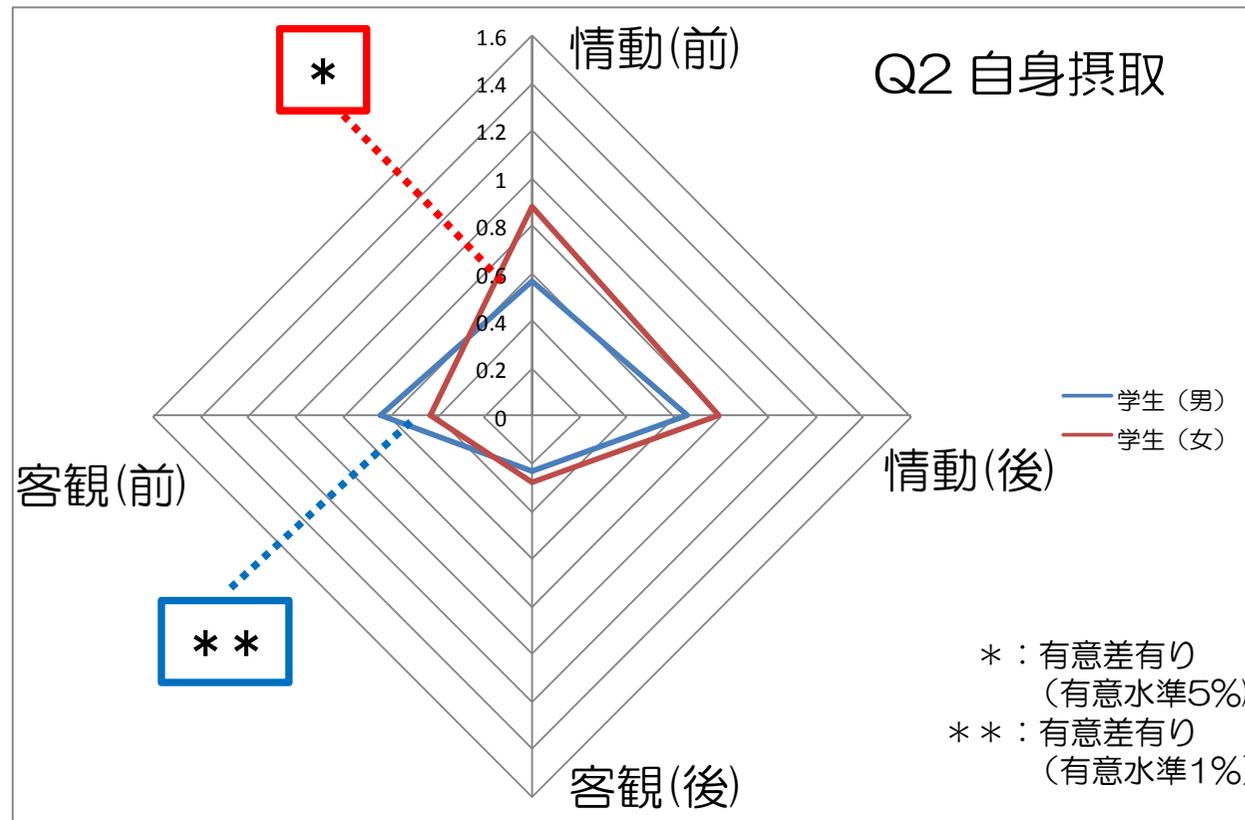
# Q2自身の摂取

## 新型インフルエンザ患者の年齢分布（日本）



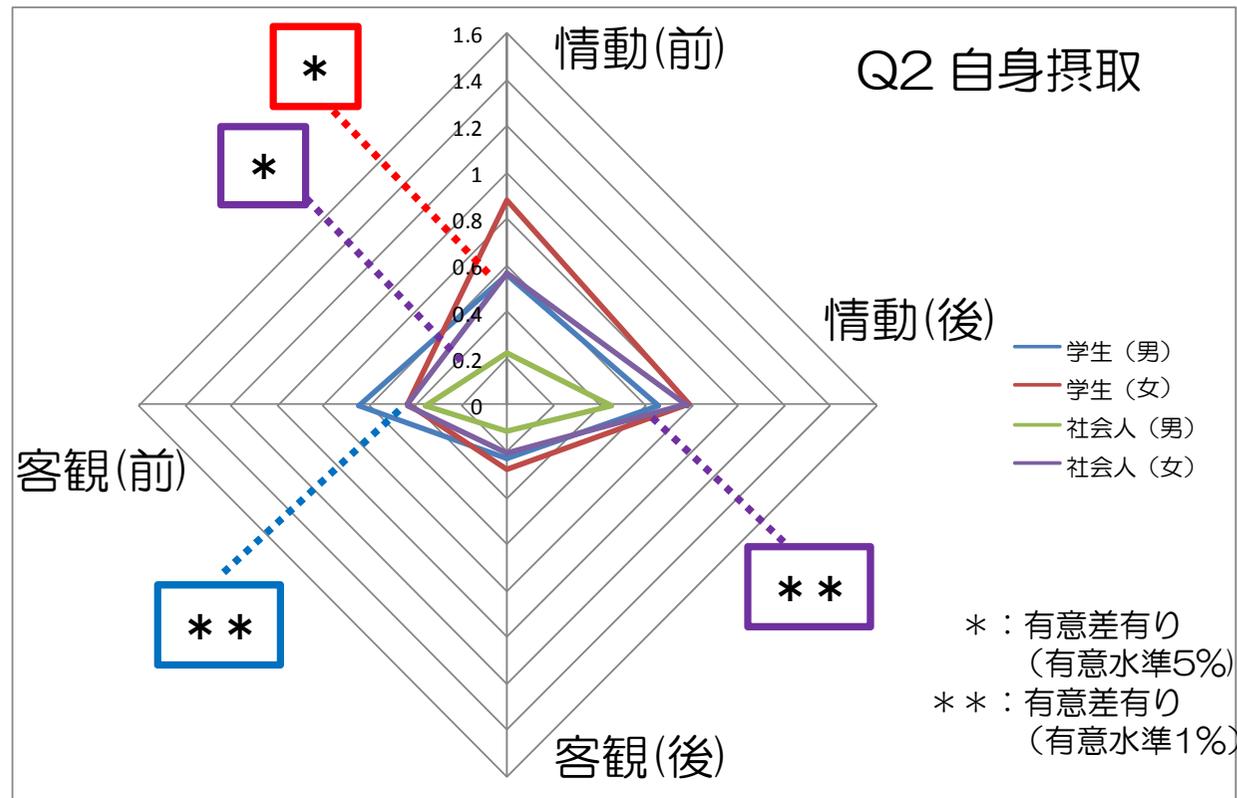
- 若者層を中心に罹患が拡大している  
⇒ 学生にとってタミフル摂取の判断は重要な話題

# Q2自身の接取



- 男：情動的情報を与えた後の客観的情報から受ける影響は小さい
- 女：先・後に係わらず、情動的情報から受ける影響が大きい

# Q2自身の接取



- 社会人でも同様の傾向
  - 男：情動的情報の後の客観的情報の影響は小さい
  - 女：先・後によらず、情動的情報の影響が大きい
- 社会人は情報から受ける影響が小さい

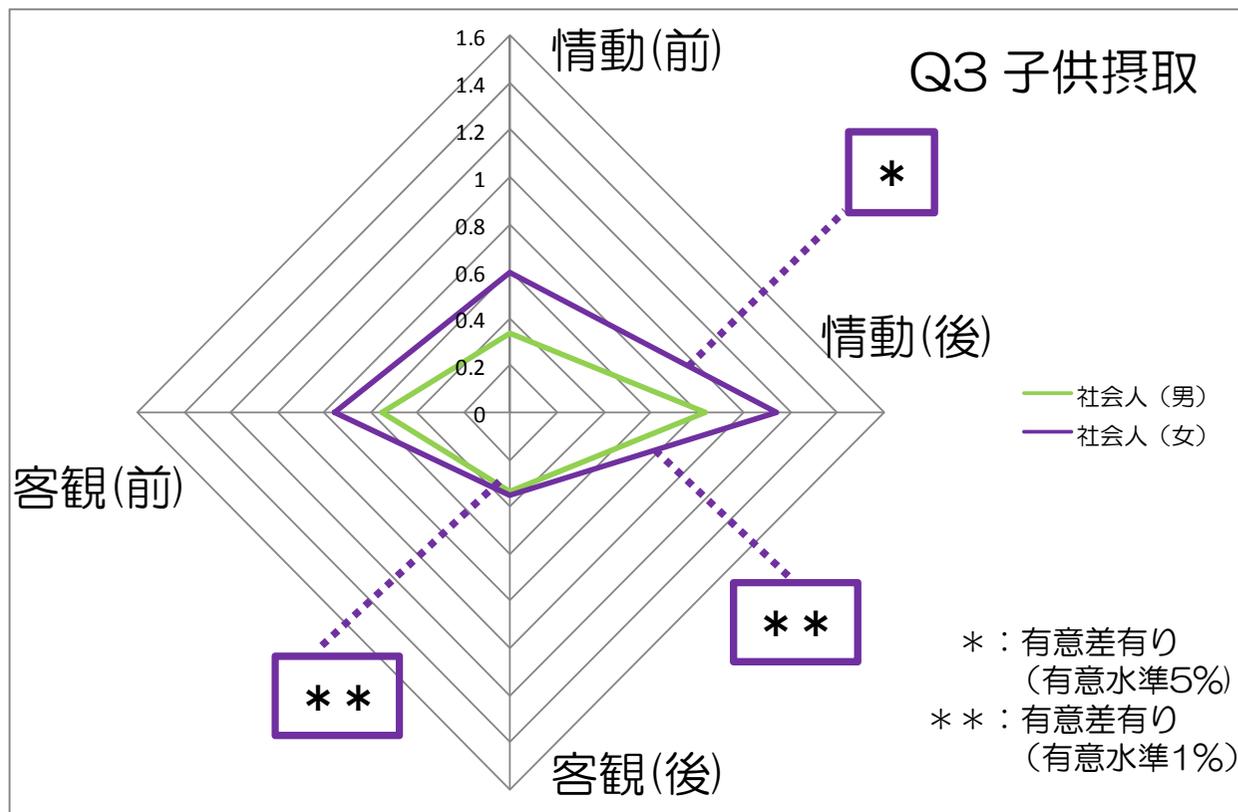
# Q3子供への接取

## 新型インフルエンザ患者の年齢分布（日本）



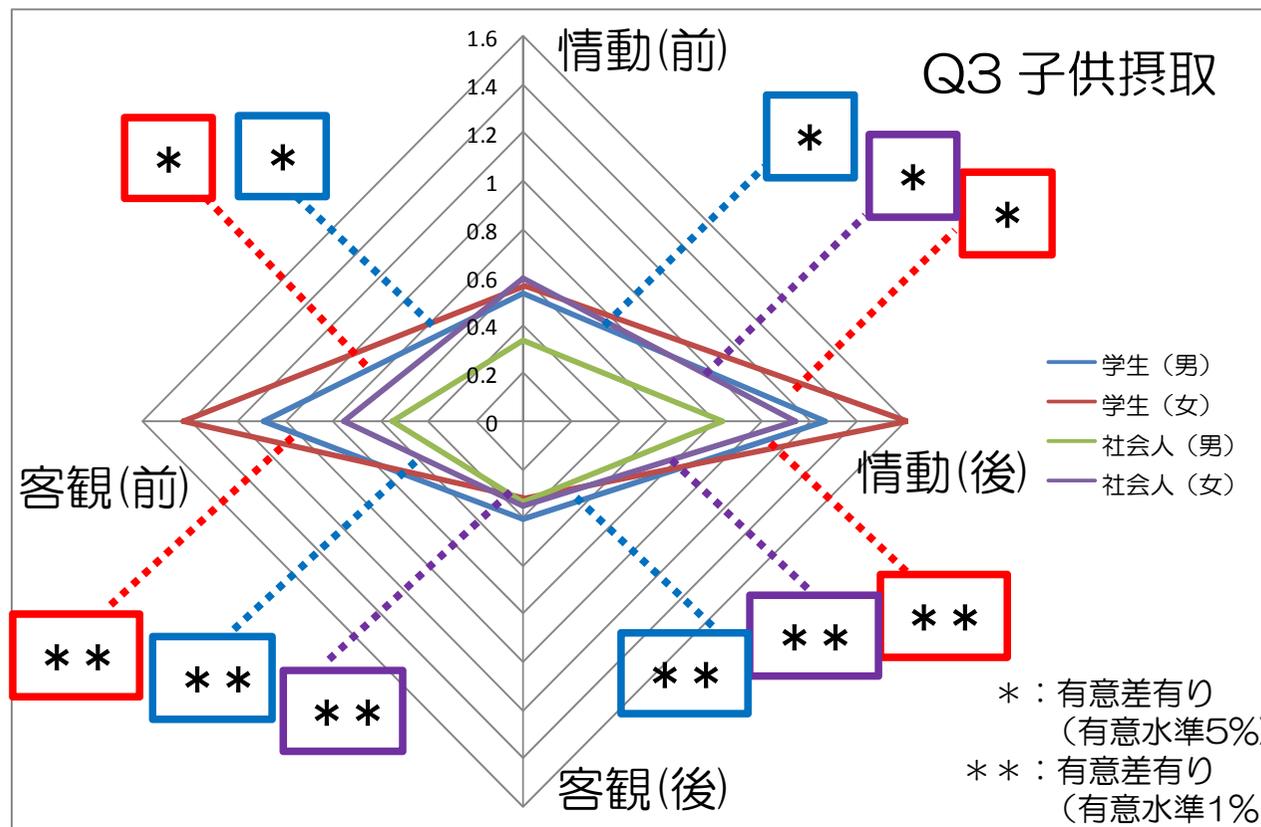
- 小さい子供も罹患の可能性が高い
  - 副作用の事例は、幼少の子どもに多い
- ⇒ 親にとって、子供への摂取の判断は重要な話題

# Q3子供への接取



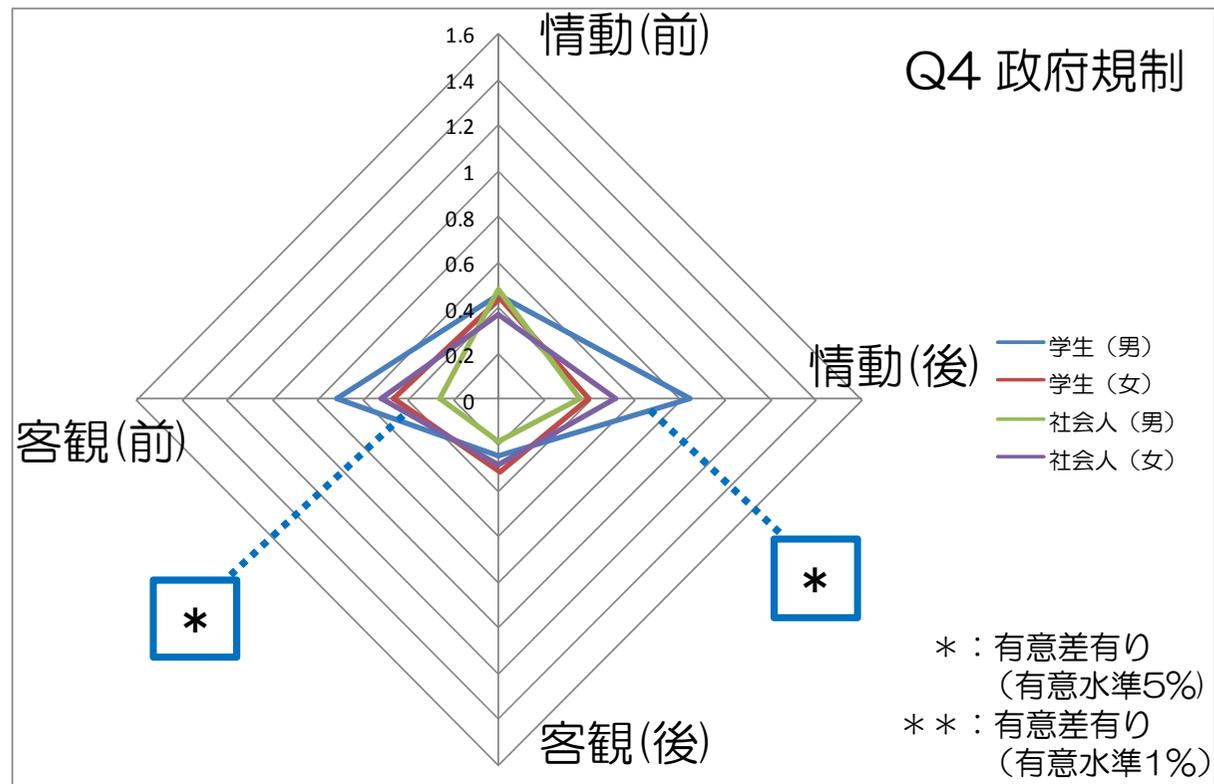
- いずれのパターンでも情動的情報の影響力が強い
- 客観的情報を与えた後に情動的情報を与えると最も影響が大きい

# Q3子供への接取



- 学生でも同様の傾向
  - いずれのパターンでも情動的情報の影響力が強い
  - 客観的情報の後に情動的情報を与えると最も影響が大きい
- 学生では、客観的情報が先に提示されたパターンで、より大きく反応

# Q4 「政府の規制の賛否」



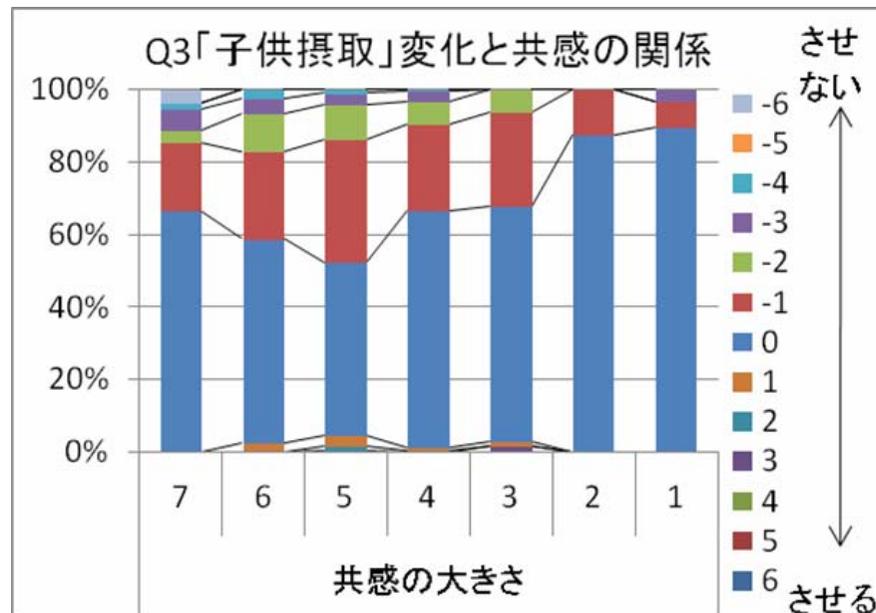
- 社会人 (男) は、情報に影響を受けにくく  
学生 (男) は、情報に影響を受けやすい

# 共感とリスク判断の変化の関係

Q2自身の摂取  
(与えた情報 「親友」体験談)



Q3子供への摂取  
(与えた情報 「親友」体験談)



- 共感が大きいほど、リスク判断の変化も大きい傾向が見られる
- しかし、極端に大きく共感をした人は、情報から受ける影響がやや小さい

# 5. まとめ

# まとめ

- **情動的情報**は、人々に与える影響が大きい
  - その大きさは、共感の大きさと関係が見られる
  - 情報が与える影響が最も大きくなるのは、**客観的情報**の後に**情動的情報**を与えたとき

➡ リスクコミュニケーションを円滑に進めるには、**客観的情報**の後に**情動的情報**を与えると最も効果的

しかし、影響が大きいということは、誤った情報を流したときの責任も大きい



マスコミ：**情動的情報**を流すに前には、**客観的情報**により正確なリスク判断が必要とされる

研究者：**客観的情報**からリスクを明らかにすることができ、そのリスクを世に広める必要があると判断した場合、**情動的情報**を交えて情報を伝えていくことが必要

ご静聴ありがとうございました

# 付録

# SVSとは？伝統的モデルとの関係は？

## 伝統的二要因モデル

能力についての認知

公正さについての認知

信頼

- 従来のモデル
- プロセスが重要視される場合に当てはまる

## SVSモデル

価値類似性の認知

信頼

その他の評価

- ・ 能力についての認知
- ・ 公正さについての認知
- ・ 態度

- 新たなモデル
- アウトカムが重要視される（利害関係がある）場合に当てはまる
- 信頼は価値類似性と最も高い相関を示した

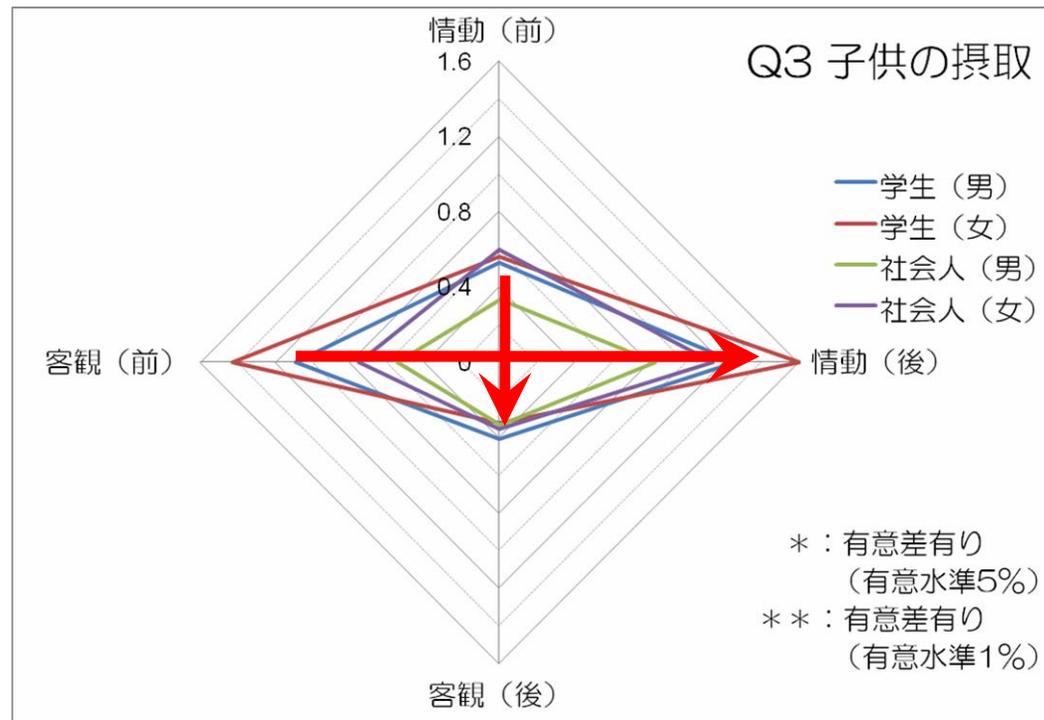
- 矢印の向きは、明らかにできない。（考えの違いと言える）
- 能力と公正さの認知に相関があり、その点でSVSモデルが有効と考えられている

# リスク判断って何？

番号	質問内容	質問意図
Q1	タミフルは危険な薬だと思いますか？	ハザード・リスク認知
Q2	自身がインフルエンザにかかった際に医者からタミフルの処方をお勧められたら、タミフルを摂取しますか？	行動意図 (自身のリスク)
Q3	あなたの子供がインフルエンザにかかった際に医者からタミフルの処方をお勧められたら、タミフルを摂取させますか？	行動意図 (子供のリスク)
Q4	政府はタミフルの使用を規制すべきだと思いますか？	リスク認知 (社会のリスク)
Q5	あなたは、この文章にどの程度「共感」を感じましたか？	価値類似性

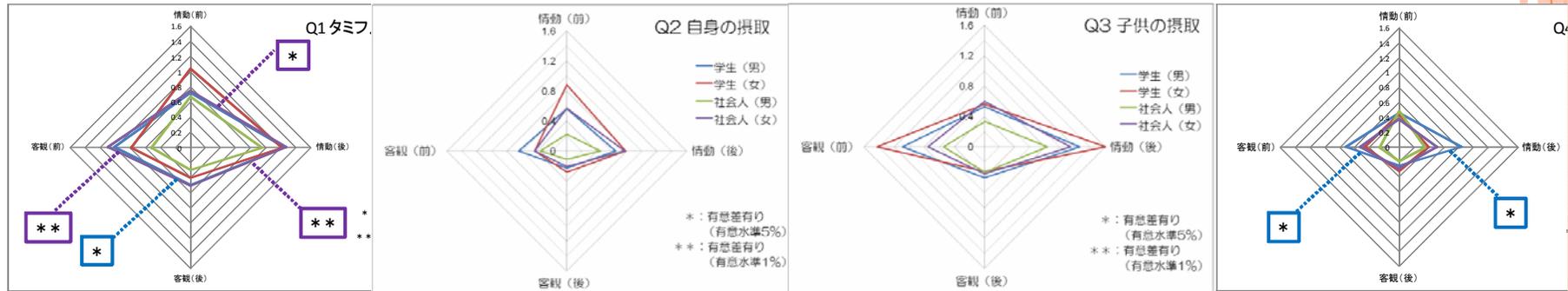
これら4つ総じて、便宜上「リスク判断」と呼んでいる

## 前半に与える情報として、 客観的情報が支持された理由（我々の見解）



- 前半に**情動的情報**が提示された場合、その情報を信頼できなかつたため変化が小さい
- **客観的情報**が先に与えられた場合、情報を信頼できたため大きな変化をした
- しかし情動的情報は客観的情報より優位性がある

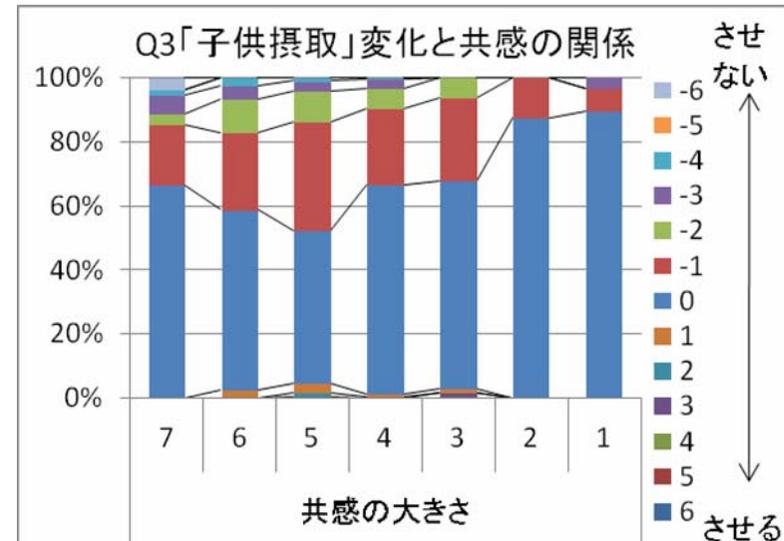
# 質問項目別に変化の大きさが異なる原因（我々の見解）



	Q1 危険性認知	Q2 自身の摂取	Q3 子供への摂取	Q4 規制の賛否
変化	大きい	小さい	大きい	小さい

- タミフルの危険性認知が大きく変化しているのは、妥当
- 自分の体のことは、自分である程度分かっている。
- 子供のことは、自分のことではなく、分からないことが多い。
- 自分に関係がないと考えている。  
これだけの情報では、他人に影響を与える判断をできないと考えられている。

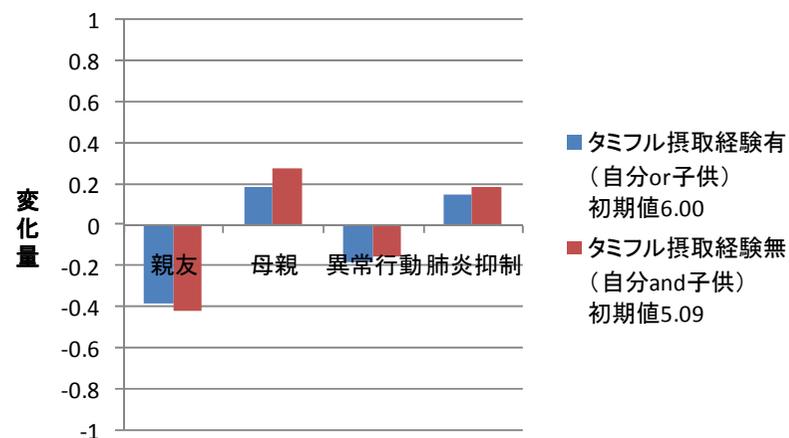
# 共感の大きすぎる人が変化をしない理由（我々の見解）



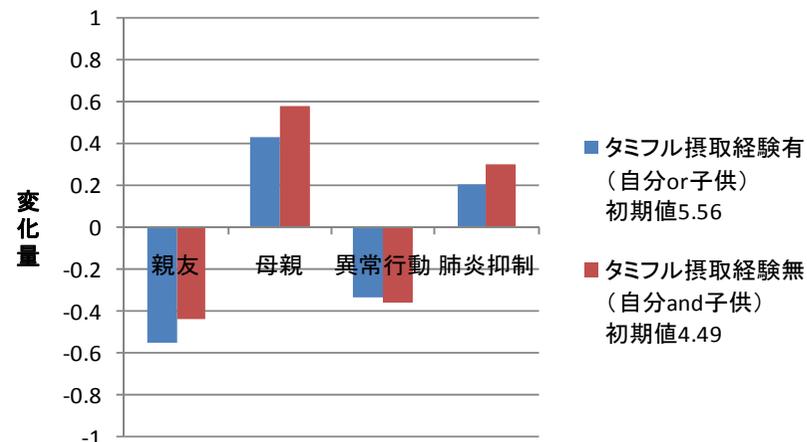
- 極端な回答をしている人は、真剣に回答していない可能性がある。
- しかし一方で、共感の大きい人の中に、大きな変化をしている人が多い。

# タミフル摂取経験とリスク判断の関係

## Q2「自身摂取」の変化と摂取経験の関係

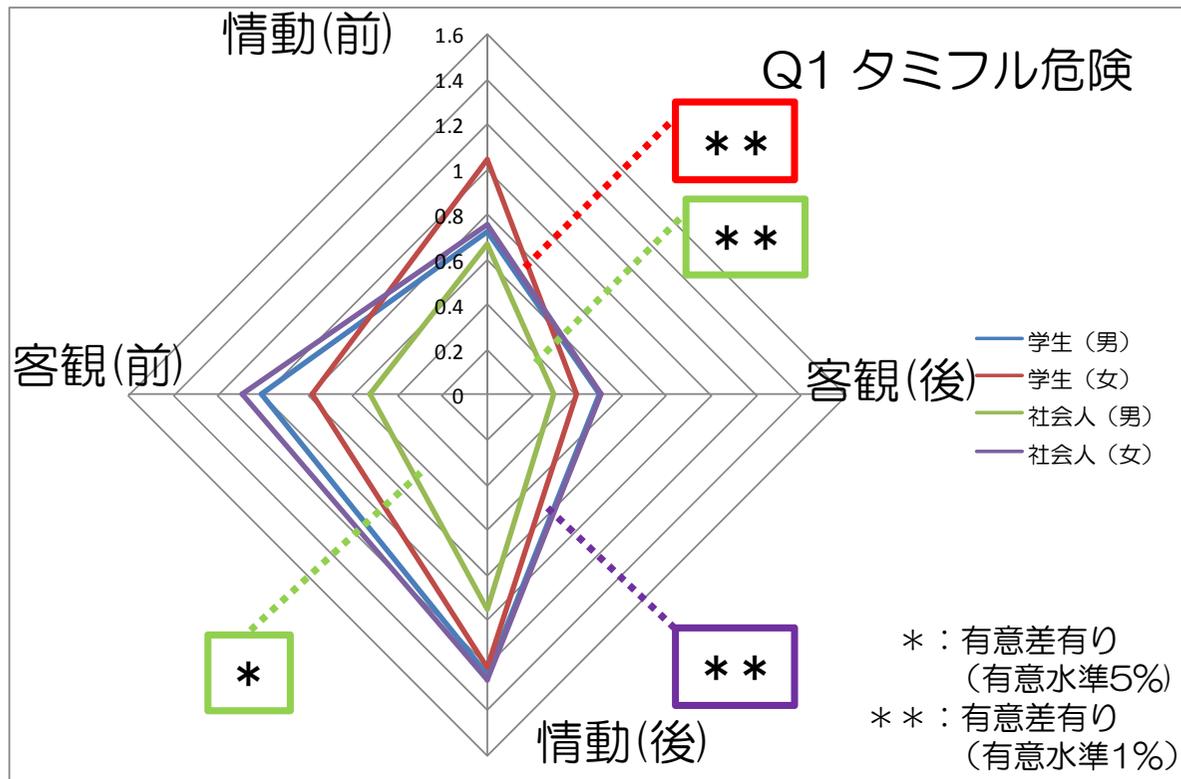


## Q3「子供摂取」の変化と摂取経験の関係

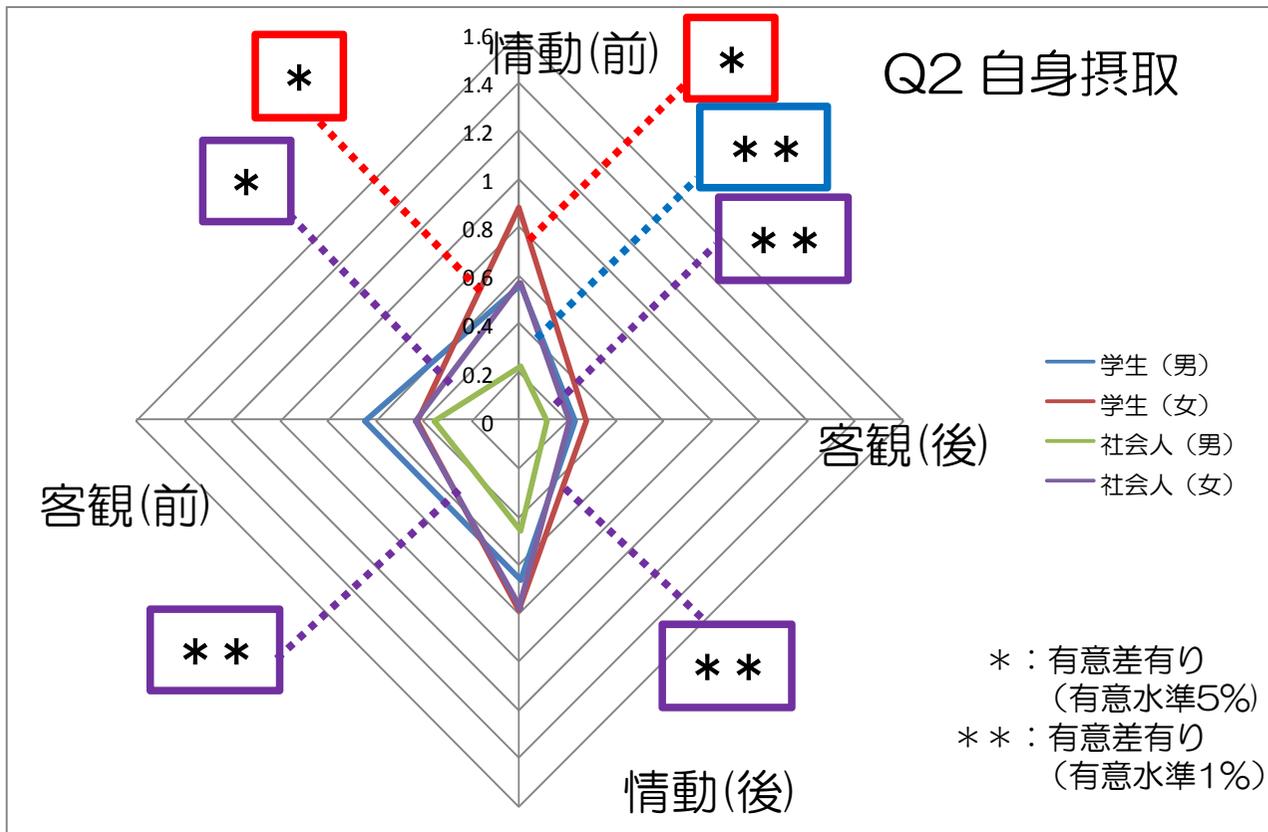


- タミフル摂取経験がある人の方は、もともと摂取しやすい傾向、情報による変化は小さい
- しかしタミフル摂取経験がある人の方が変化が大きい場合もある（Q2における「異常行動」情報による変化、Q3における「親友」情報による変化）

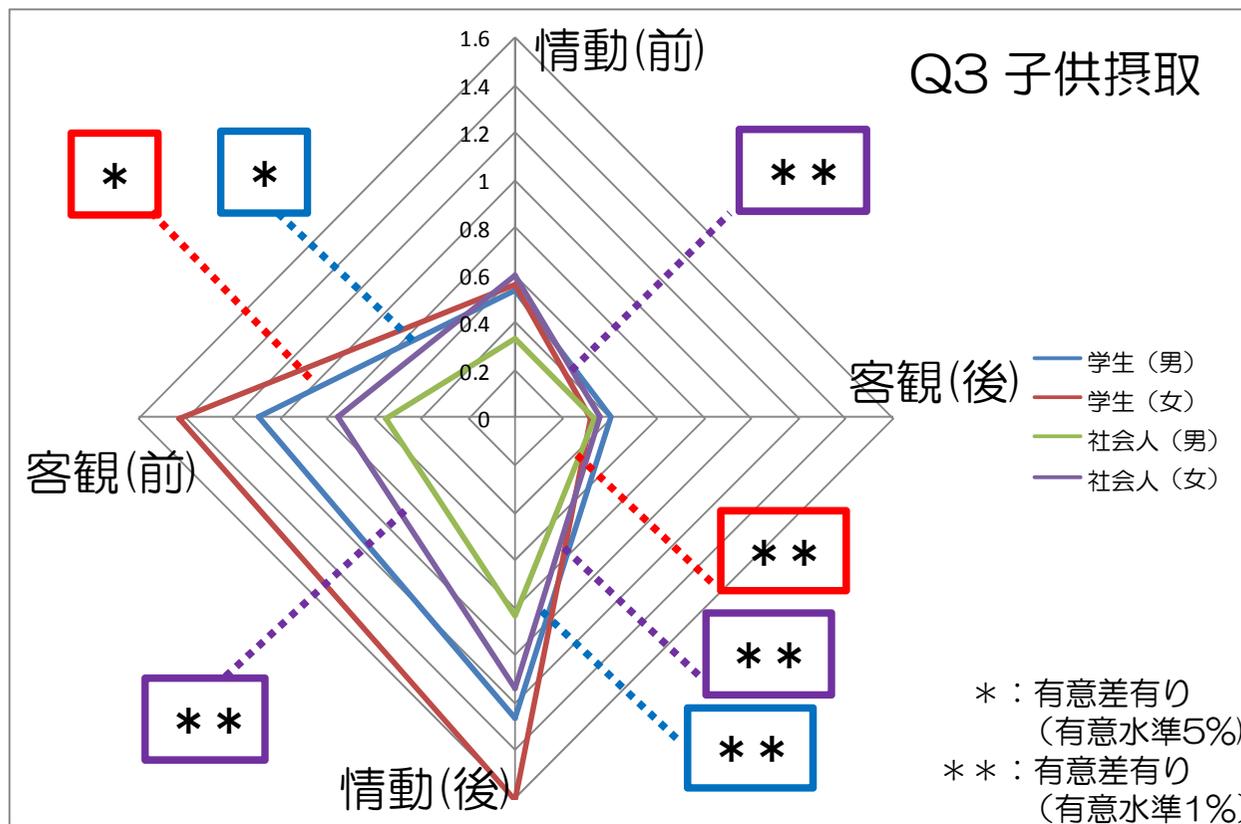
# Q1タミフルの危険性認知



# Q2自身の接取



# Q3子供の接取



# Q4 「政府の規制の賛否」

